

主体的にまちづくりに参画しようとする中学生の育成と、
子どもの発想を実際のまちづくり（公園の活用・育成）に反映させる
プロセスに関する調査

2004年3月20日

NPO 法人 まちの縁側育くみ隊

主体的にまちづくりに参画しようとする中学生の育成と、子どもの発想を実際のまちづくり(公園の活用・育成)に反映させるプロセスに関する調査

1 活動の背景

未来の意思決定者は子どもである。住まいもまちも、住み手・住民がどんな場所を住みよいかと思うキモチを反映してカタチをなす。美しい居心地のよいまちのカタチは、子どもの頃からの身近な環境への気付き・関心の高まりによっている。子ども時代の経験と培われたものの考え方は必ず大人になってからの住まい・まち育ての行動につながっていく。

現代の子どもは、モノやメディアにあふれる環境の中に埋もれてくらし、まちの人々とのかかわりはきわめて少ない中、名古屋市北区大曽根中学校は、平成13年度に、中学校3年間を通した総合的な学習の時間として「大曽根のまちづくり学習」を構想した。(図1、表1)

その構想では、大曽根のまちを舞台に、繰り返しまちの人々とかかわりながら、身近で現実的な課題にとりくむ中で、やがて子どもたちの意識の中にまちとかかわりの接点の発見や、まちづくりの発想を高める機会が増えることによって、主体的にまちづくりに参画しようとする生徒を育成し、将来、どの地域で住み働こうとも、「まちづくり人」(まちのハード・ソフトの質を高めることに生きがいを見出す自覚的市民)になりうる潜在力を育成することを目指した。

一方、大曽根中学校周辺では、名古屋市が土地区画整備事業をすすめてきており、学校周辺には、大小の公園や子どもの遊び場や多目的集会所や生活道路の整備事業がすすめられている(図2)。とりわけ、区画整備関連公園整備事業において、子どもたちの提案を促すことは、その計画・事業のすすめ方、及び、既存の公園の活用・育成にインパクトを与え、子どもの育くみとまちの育くみを具体的につなぎとめうる可能性をひらく。

2 活動の経緯と目的

2.1 活動の経緯

本団体が本対象地域に関わり始めたのは、2003年9月である。その契機は、大曽根中学校の3年生が平成15年春に修学旅行で、NPO法人千葉まちづくりサポートセンターの活動場所を訪ねたことにある。本団体代表理事の延藤は、以前、千葉まちづくりサポートセンターの代表をしていたため、このことが契機となって、名古屋ではじめた新しいNPO法人まちの縁側育くみ隊が、大曽根中学校の総合的な学習の時間におけるまちづくり学習のすすめ方の相談を受けることになった。

本団体と地方公共団体(名古屋市)との関わりは、東区における文化のみち歴史的建築物のプロジェクトに関わる中で、北区における本地区関連事業の担当課ともつながりを生みだしつつある。

2.2 活動の目的

中学生たちのまちへの気付きと提案の流れを「タンケン・ハッケン・ホットケン」といった体験と、それが促す表現への結合、さらに、成果の地域住民への発表と対話をたちあげることにより、子どもの主体的育みと子どもの発想を実際のまちづくりの展開に生かす過程と手法を明らかにすることが本活動の目的である。

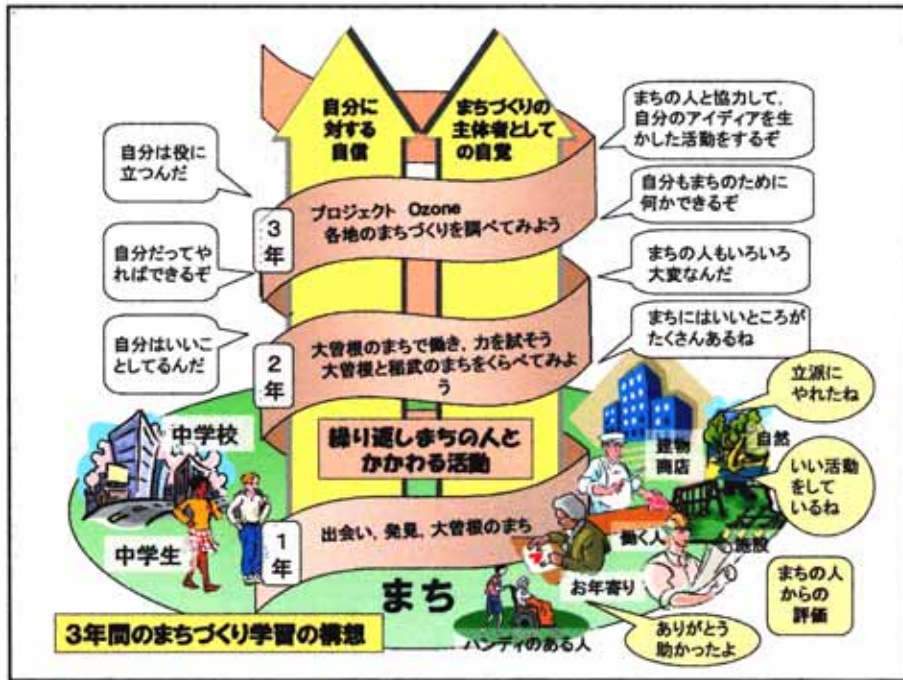


図1 大曾根中学校のまちづくり学習の構想（瀧田健司先生による）

表1 総合的な学習 3年間の単元構想 「大曾根のまちづくり学習」

各単元は「課題に出会う→課題を追究する→成果を表現する→ふりかえる」という4段階で進める。

学年	学習単元	主な内容	期待される生徒の定容			
			人とかかわる能力	自分に対する自信（成長感）	まちづくりの主体者としての自覚が表れる具体的な行動	まちの人の反応や評価
1年次	大曾根のまちを探検	大曾根のまちを探検し、ワークシートを完成させ、まちの人と一緒に歩く。	まちの人に自分から話しかけて、まちの人から話を聞くことができる。	恥ずかしかったけれど話ができ、自分たちはいいことをやっているんだ、肯定感。	大曾根と稲武のまちをデータなどで客観的に捉え、比較し、それぞれの良さや大変さなどに共感する。	まちの良さを探さなくて、なかなかいいことをやっているね。
2年次	大曾根のまちで体験	大曾根のまちの中で働く体験を職業体験学習として行い、まちへの理解と職業観を深める。	テーマを持ったインタビュー活動ができる。稲武の人からも話を聞くことができる。	自分で課題を見つけ調べ方も工夫して調査することができたぞ、有能感。	大曾根と稲武のまちをデータなどで客観的に捉え、比較し、それぞれの良さや大変さなどに共感する。	昔は黒川で泳いだものだ。稲武は自然が豊かだけれど冬は厳しいぞ。
3年次	まちに提案	各地のまちづくりを調べ、大曾根と比較検討する。修学旅行で実地調査をする。	他のまちの人に質問して、話を聞くことができる。	東京でも調べることもなく活動できたぞ、有能感。	各地のまちづくりに参加する体験をし、共感し、調べたことを大曾根のまちに生かそうとする。	名古屋の中学生は積極的に感想だね。
	大曾根のまちに「プロジェクトOzone」	これまでの活動をもとに各自がテーマを持って大曾根のまちを調査し、まち改善のための提案活動を行う。ボランティア活動などの実践活動を行う。	まちの人に質問して話を聞くことができる。自分の考えを伝えることができる。まちの人と相互に意見をやりとりすることができる。	これまで世話になってきた大曾根のまちに恩返ししたい。自分にも役に立つことができるぞ、有能感、有用感。	まちの人の思いを大切に、まちの課題を調査し、その改善案を提案する。まちづくりに生きる提案になるようにまちの人と共働して立案し、まちづくりへ参画していく。	近頃の中学生は…と思っていたけどなかなかやるじゃないか、またおいで。

<資料> 「総合的な学習の時間」名古屋市立大曾根中学校 2003. 4

整備計画図（変更前）

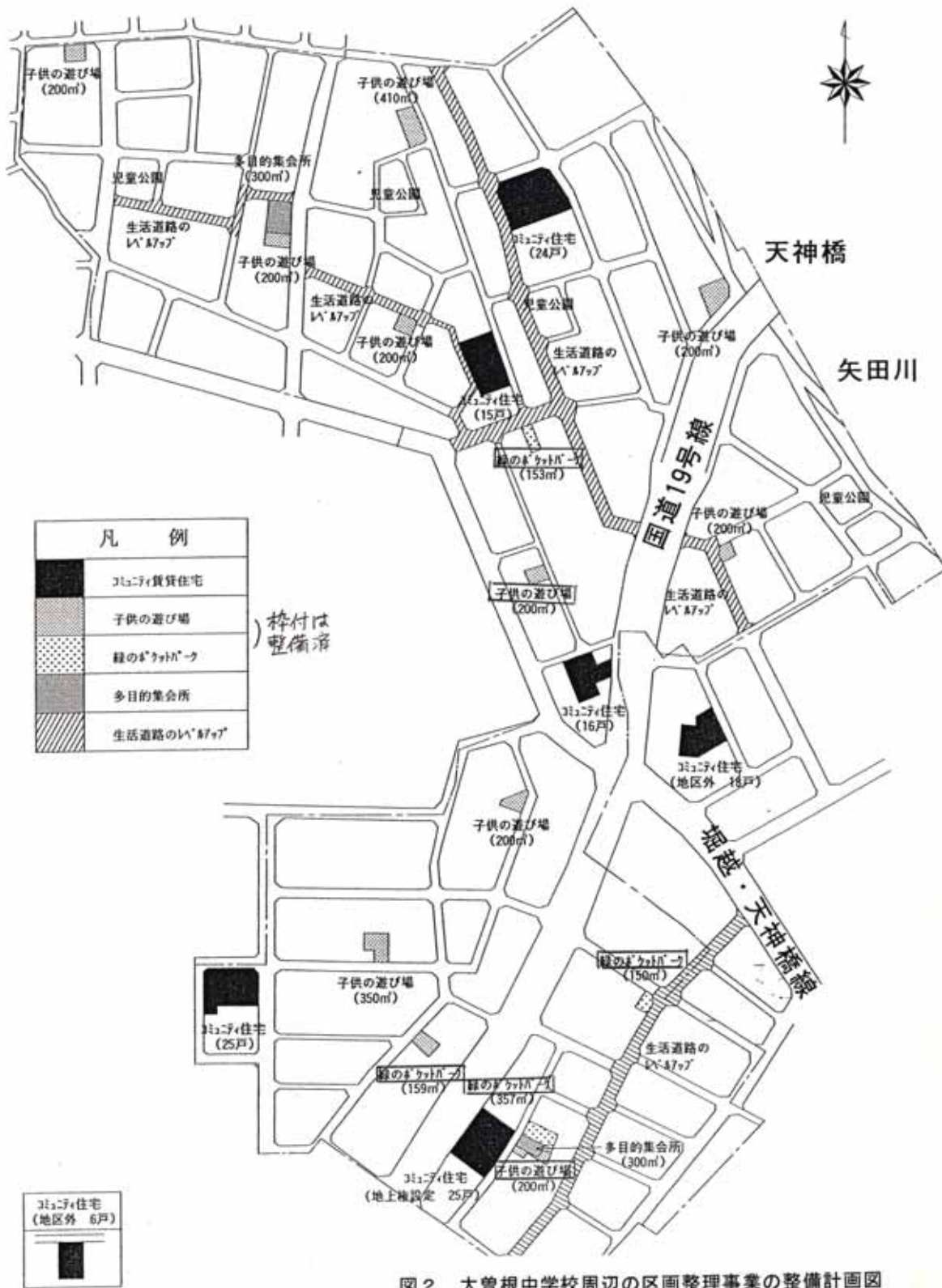


図2 大曾根中学校周辺の区画整理事業の整備計画図



こんな広場があるといいな。プログラム'03,09.17

～NPO法人まちの緑創育の隊 延藤

▶ 地域の人々に愛される広場とは、どんな出会い
や出来事があるのでしょうか？ ヒ・ホ・モの
つながり・うねりがある「物語」を構想し、
2か所の住民参加のまちづくりの動きが起る
端緒をいらましよう！



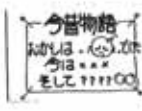
1 ⁹/₁₇

- ▶ 「こんな広場があるといいな」七夕燈会
- ▶ まちに出よう - タンケン・ハッケン・ホッケン

<グループ別宿題：まちタンケンから未来の物語づくりのヒントへ>

2 ¹⁰/₁

- ▶ 「こんな広場があるといいな」紙変居おかし実演
物語づくり



3 ¹⁰/₈

- ▶ 「 ” 」のビジュアル表現
- 紙変居・絵本・模型など



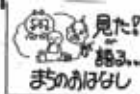
4 ¹⁰/₁₅

- ▶ 「 ” 」グループ別発表 + 討論 + まとめ



5 ¹⁰/₁₉

- ▶ 「大曽根商店街の秋祭り」で発表



- ▶ 地域住民からの反応・動き？



3 活動の内容

3.1 中学生の学習、提案活動

上記目的を実現するために図3のような、学習・提案プログラムを組んだ。

1回目：

「こんな広場があるといいナ」幻燈会を行い、その後、まちへ出てまち探検。幻燈を見た生徒は、遊ぶ場所の変化...「昔と比べると緑が減り、遊ぶ場所も変化した、減った」「どんどん人工的になっている」自然との関わり...「遊具だけではなく自然を感じながら遊びたい」「生き物と共存している公園がステキだった」「自然を大切にできる遊びを考えてみたい」自由に遊べる...「きまりに縛られすぎず自由な空間が大切」「大人も子どもも一緒に仲良く、子どもは自由に遊べるように」などの点に着目していた。まち探検では、「ゴミが多い」「公園は人がいない、さみしい感じ」などの問題点を発見し、地域の人へのインタビューでは「この地域の子どもの大人もそれぞれ公園に対する強い意見を持っている」「ほとんどの人が公園を危ないと思っている」「みんなまちのことを深く考えていなかった」などの感想があった。

2回目：

「まちづくり紙芝居」制作のためのコンセプトとプログラムの具体的内容を示した(資料1)。「こんな広場があるといいナ」ビジュアル表現の例として、「風穴一座」による紙芝居「ツトムくんの夏 - 遙かなる Bee わが島」を実演した(写真1、2)。「風穴一座」は、ひとにやさしいまちづくりを目指して障害者の登場する紙芝居活動をしている。座長(大久保康雄)はNPO理事の1人でもあり、生まれつきの障害を持っているが、紙芝居の脚本やその他にもライターとして、健常者と障害者の心のバリアをなくそうと様々な活動している。紙芝居を見た生徒の感想は「ビックリ!」「障害があっても、それは個性みたいなもの」「わかりやすかった」「話を進めるだけでなく伝えたいことが話の中に盛り込まれていてスゴイ」「紙芝居づくりはおもしろそう、やる気がでた」「難しそう」などであった。



写真1 「風穴一座」の紙芝居実演



写真2 紙芝居に見入り、聞入る中学生たち

3回目：

物語・紙芝居づくり。それぞれの班のタイトルが決定。「歌って踊ってポップコーン」「ネコが君を呼んでいる」「江戸からキタ武蔵。ってやんでいっ」「自然いっぱい公園 - いくつになっても青春ばんざい」「THE 思い出」「みんな笑顔になったネ - 笑い声が聞こえる公園」「いやし系広場 - 自然がもりもり」となった。初めは、「仲良し公園」などよくある真面目なタイトル案が出されていたが、生徒同士、先生、NPOメンバーからの様々な意見に触発され、楽しみながら進めるうちにどの班もストーリーが公園とはなかなか結びつかないほどユニークなタイトルとなった(写真3、4)。



写真3 タイトルのアイデアを交換する



写真4 「ネコがきみをよんでいる」というユニークな表現

4回目：

引き続き物語・紙芝居づくり。物語の内容については、それぞれの班に違った視点があり、例えば、ゴミ問題、いじめ、行政と市民の関係、近所からの苦情など身近にある様々な問題を取り入れながら話が展開していった。(写真5、6、7)



写真5 グループ毎に制作に夢中になっていく



写真6 できた紙芝居を教室で発表。大久保さんはコメントする。



写真7 寸劇風の発表

5回目：

地元の商店街 OZ モールで開催された秋祭り「大曽根秋 FESTIVAL」の中で、「見て下さい。聞いて下さい。ぼくたちの提言 - 大曽根のまちにできること」として空店舗を利用した会場で総合的な学習の発表を行った。(写真8、9、10)

当日は小学生から60代まで(アンケート記入分)の様々な年代の方が発表を聞いて下さった。全体的な評価としては「絵が上手」「熱心に取り組んでいた」「もう少し工夫が必要」など。内容に関しては「ストーリーの展開がおもしろかった」「紙芝居中の話のように市長と住民が連携できたらいいですね」「よくわからなかった」などの意見があった。発表に関しては、「棒読みが多い」「もう少しゆっくり感情を込めて読んでほしい」「マイペースすぎる」など練習不足、段取りの悪さが目立っていた。



写真8 紙芝居に見入る人々



写真9 「歌って踊って...」を見せる中学生



写真10 空店舗での紙芝居発表

3.2 中学生たちの提案を住民に発表し、対話の現場を立ち上げる

(1) 発表をしかける

先にみたように、中学生たちの紙芝居制作の内容にはみはるべきものがあった。そこで、これを地域住民のところで発表し交流しようと中学校側に提案した(2004年1月)。しかし、制作した中学生たちは3年生であり受験の合間のまことに困難な時であった。

しかし、有賀校長先生と滝田先生は「やってみよう」といわれた。管理職としての責任者である校長先生の通常予想される反応は、「この時期は無理です」のはずであるが、彼はこのようにいわれた。「こんなに意味あることはやってみましょう。私は区政協力委員のところに交渉に行きます」と。その場で、諸々の条件を提案して2月22日の日曜日の午後にやろうということになった。

六郷北コミュニティセンターという発表の場所(写真11)は、その隣地の「合体公園」をか

つて地域住民が住民参加のワークショップで設計したところであった(資料2)。わけあって、その公園はその後、青少年による環境破壊がおり、管理運営面ではうまくいっていない場所であった。

その日のプログラムづくりのために滝田先生は NPO 事務所に相談にみえられた。校長先生の努力によって区政協力委員の協力で発表会は開くことになったが、参加者案内が問題であった。提案対象が公園・広場であり、提案表現が紙芝居であることから子どもたちの参加をどうするかについて語り合った。滝田先生は「子ども会にかけあって参加する子どもと親たちを集めてみましょう」といわれた。

2月22日(日)の午後2時から4時の間に、六郷北コミュニティセンターには30数人の子ども・大人が集まった。中学生たちも12人参加した。(写真12)

当日プログラム(資料3)は、有賀校長先生のあいさつに始まり、滝田先生から大曽根中学校におけるまちづくり学習の構想と経過が語られた。あわせて、民間テレビ放送が取材した番組もビデオで短時間紹介された。

次いで、参加者のキモチのウォームアップのためにNPO(延藤)によるまちづくり幻燈会が行われた。

中学生たちの紙芝居発表に先立って、NPOメンバー・「駄菓子屋たけちゃん」こと渡辺丈紀君によって、駄菓子が配られ雰囲気を高めた(写真13)。

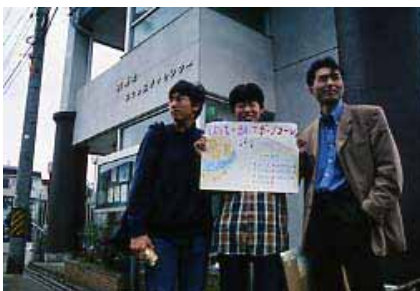


写真11 地域のコミュニティセンターに発表にきた。



写真12 中学生たちの発表を聞く、見る子ども・住民たち



写真13 「駄菓子屋たけちゃん」はアメを配る

鐘の合図とともに、中学生たちの7つの紙芝居の発表が行われた。

- 1 「歌って踊ってポップコーン」(写真14)
- 2 「ネコが君を呼んでいる」(写真15)
- 3 「THE 思い出」(写真16)



写真14 「歌って踊ってポップコーン」 写真15 「ネコが君を呼んでいる」 写真16 「THE 思い出」

- 4 「自然いっぱい元気で楽しくーいくつになっても青春バンザイー」(写真17)
- 5 「江戸からキタ武蔵、ってやんでい」(写真18)
- 6 「みんな笑顔になったねー笑い声が聞こえる公園」(写真19)
- 7 「いやし系広場 自然が森森」(写真20)



写真17 「自然いっぱい元気で楽しく…」



写真18 「江戸からキタ武蔵」



写真19 「みんな笑顔になったね…」

(2) 住民の反応と交流

紙芝居を見ながら、参加者たちは配られたねりあめをなめなめ心地よい表情になっていた。笑いとざわめきがたゆまずおこった(写真21、22)。



写真20 「いやし系広場 自然が森森」



写真21 中学生たちは笑顔で発表



写真22 ユーモアある内容に笑いが炸裂する会場

紙芝居の発表の後、会場参加者と中学生たちの間に次のような意見交換が行われた。

1. 小学校高学年の女の子：「(紙芝居の絵の) 表し方が面白い！」とストレートに賞賛と共感の意を述べた。
2. 初老の女性：「中学生がこんな紙芝居をつくってくれてうれしい。私は、いつも地域の公園で中学生たちがいたずらやモノを放ったりしているのを見て注意したり怒ってばかりいた。しかし、今日の発表にふれて反省しています。怒るよりも対話することが大切だと思いました。」と、否定するよりも子どもとの応答・対話の関係の中で、肯定的方向感を生み出しうる可能性への気づきを率直に発言された。
3. 初老の男性：「気負わずに花をたんたんと育てる活動の提案があったが、合体公園をそんな風に使っていければいい」と共感の声。
4. 大学生・男性：「物語の中に必ず悪役が登場するが、いずれも彼らを味方にしていっている筋が素晴らしい」と「悪」を敵対的に排除するのではなく、やりとりの創造的展開の中で双方が結びあう関係を生み出すという創造的まちづくり発想をしている中学生たちへの評価として大変意味深い。
5. 高齢・男性：「下手の横好きで写真をとるのだが、まちの中では本物のネイチャーに出会わない。今日の中学生の発表には本物の生命ある自然を回復することへの願いがこめられていて素晴らしい！」と人間と自然の共存するまちづくりへの共感がよせられた。
6. 若い主婦：「中学生らしく リコール など社会的表現がみられて視野が広げられた」と市民・行政の対立から協働の関係の視点への気づき。
7. 中年の主婦：「タンケン・ハッケン・ホットケンから紙芝居づくりの体験・表現を通して公園・広場の見方が変わりましたか？」の質問に対して、中学生たちはこう反応した。
 - a. 「楽しいところ」であれば、事態は変わりうるのではないかということ。

- b. 「住民一人一人が動く」と公園は変身していく。
 - c. 「10 数年生きていて、愛が大切。自分たちの住んでいるまちが好きになる、愛せるということの重要性」
 - d. 「幼い頃に公園で遊んだ思い出が自分の中に残っている。今の子どもたちにいい思い出が
つくれる公園にしたい」
- と鋭くかつ本質的に重要な返答があった。

- 8. 小学校の校長先生：「こんなに新鮮な提案を実行していけるように大人が受けとめるべき」と大人のあるべき態度への示唆。
- 9. 市役所職員：「合体公園づくり、この地区のコミュニティ道路づくりを担当しました。ここの住民意識は高い。若い中学生たちの取り組みを参考にしていきたい」と行政参加者の反応。
- 10. 主婦：「小学生を持つ母親として、大曽根中は大丈夫かしらと思っていたが、外からのウワサを聞くのと、こうして内側からの発表にふれるのでは全く違う。うちの子どもを安心して大曽根中学校にやれます」と、学校への安心感をよせる発言。
- 11. 区政協力委員長：「有賀校長先生は学校の管理責任者の立場をこえて、地域と学校の交流に熱心な方。ありがたい。合体公園は住民参加で設計したが、あとの使い方、管理段階で傷み方がひどい。管理運営が難しい。」とこの日の中学生たちの発表内容にすぐさま触発されて「こうしよう」の発話には結びつかなかったが、少なくとも関心がよびおこされていった。

以上のように、中学生たちの紙芝居による公園・広場の使い方、管理運営提案は、幅広く住民各層の中に大切なことへの気付きを促されていくものとなった。加えて、地域住民からの多様な評価により、中学生たちと中学校側の自信と誇りが高められていった。

4 活動の成果

4.1 紙芝居づくりの成果

中学校の総合的学習の時間のまちづくり学習において、公園・広場を対象にしながらその使い方と管理運営過程での出来事を通しての物語提案と紙芝居づくりをしたことの成果は次の通りである。

今、小・中・高校では、総合的学習の時間に、まちや環境を学ぶ機会が制度化されている。その中でまちに出向いてまちのコマッタクン(問題点)とタカラモノ(魅力)の双方の「タンケン・ハッケン・ホットケン」の経験が広がってきている。しかし、心に留めたい大切なことは、単なる体験学習や調べ学習のレベルに終わるのではなく、今回試みたように体感をもたらす「内」なる「感動」(impression)を「外」に表出する「表現」(expression)に高めることが肝要である。その際の表現とは、俳句・短歌などの文学的表現、寸劇・演劇的表現、絵地図・紙芝居などのビジュアル表現、音楽表現など多岐にわたる。

今回は紙芝居という表現を試みたが、こうした多様な表現は、つくる過程を通して子どもの内側に何か大切なことを生み出す。あわせてつくったものを学内で発表するだけでなく、体験・表現の過程で支援を受けた地域住民や専門家たちにも発表し、意外な視点からほめられたり交流しあうことによって、子どもにとっては「外」から「内」へとその意味の流れがもたらされる表象(representation)が、またもうひとつの表現(再現)に至ることをもたらす。

体験・表現活動は、子どもの「内」から「外」へ、及び「外」から「内」への二重の回路のある表現という文化的身振りによって、子どもに生きる上での大切な「気付き」をもたらす。「気付き」により標準的な「同じもの」から個性的でオリジナルな「他なるもの」へと自由に赴く方向づけを実感する時、子どもまち表現学習は〈作品〉となっていく。このような内なる気付きの生成する〈作品〉としての創造的まち学習を学校や地域に広げていくことへのはじめの一歩をふみ

だすことができた。

現代日本の教育に欠けているもののひとつに表現教育が挙げられる。私たちは、視野的表現や言語的・演劇的表現等の諸領域をつなぎ、子どもの身体と魂の間に五感がフル動員される絆をデザインしていきたい。

4.2 まち育て表現学習の成果

まちづくりを子どもたちの体験・表現学習型学習を通して進めていくことにより、子どももまちも共に育まれていく過程を「まち育て表現学習」と呼ぶとすれば、今回の取組みは「まち育て表現学習」として、中学校の教師たちによってどのように評価されているのであろうか。

2004年1月27日、本調査担当の延藤は、大曽根中学校の先生方への学習会で1時間幻燈レクチャーを行った。その時の反応がアンケートに記されており、「まち育て表現学習」の成果の一端が示されているので、その要点を記し今後に備えたい。

大曽根中学校の総合的学習・まちづくり学習の中心的担当者の滝田先生によれば、紙芝居制作を通して子どもの表現力が「心の中に引き出されていくさま」が印象的であったといわれる。さらに、「引き出されたものが、こちらの予想を大きく超えて輝くさま」がすごいと指摘されている。「引き出すためには、待つこと、ほめること、触発する助け、みんな大切なんですね…」といわれるように、教育とは、子どもの内に秘めている発想力や表現力を educe = 「引き出す」ことであるという重要なことへのあらためての気づきが促されている。

そのためには、即ち、子どもたちの内なる力を引き出すためには、「どのようにして教師自身のキモチづくりをしていくのか」「生徒の持つ可能性、パワーについていけるだけの度量をもちたいですね」と教師なりの自己研鑽の必要性が自覚されているといえる。さらに、「これからも、学校と地域の連携（融合）をベースに、地域を巻き込み、地域の役に立つ中学生を育てていきたい」の抱負が語られている。

ところで、この日の学習会に参加されたある先生は「紙芝居づくりにチャレンジしたい。言葉で上手に表現できない、または苦手な子が生かされると思うからです」と述べられ、紙芝居による表現教育のまちづくり意識の高揚とは別の有効性の一端が語られている。

有賀校長先生の反応も鋭く深い。子どもたちが「楽しんで活動している様子がとてもよくわかりました。表現されたものの評価の方法、視点を身につけたいと思います」と述べられ、体験・表現型まちづくり学習を志す「まち育て表現学習」では、評価の方法が今後大切な課題になることへの方向づけがなされていて大変興味深い。

さらに校長先生は「表現的に絵・図などがどう実現されていくのか、実現できる場の設定が大切なのでは」と問題提起されている。体験・表現・評価・実現の一連の流れが現実のものになる時、「まち育て表現学習」はまさに子どもをすこやかに育むとともに、まちをハード・ソフト両方にわたり育むことの可能性を開くことにつながるということが明らかとなってこよう。

「来年度は福祉を学び、大曽根のまちづくりに生かされる活動をしたい」と次のステップへの構えを示されていて、私たちも是非そうありたいと願っている。

4.3 地域住民との交流の成果

先にもふれたように、中学生たちの物語表現・提案は、人々にマイナス事象としての地域における子どものいたずらや環境破壊などの「悪」とその当事者を「悪者」扱いせずに、具体的な問題・事象をネタに応答・応信し、そのやりとりの中から思いがけない新しい方向感をひらく、共有するといった取り組み方への気付きが住民の間におこったことは大きな成果である。

このようにトラブルをエネルギーにする、対立を対話にかえるしなやかな発想を地域住民間でわかちあうことが、地域を子どもや老人の安心居場所に育てていく上に不可欠であると思う。

5 今後の展開

大曽根中学校の総合的学習の時間に、今回は部分的関わり支援であったが、今後は、通年の関わり、支援のあり方にふみこんでいきたい。あわせて、体験・表現型まち学習の方法の内容を高めていくために、プログラム開発、実践・評価、子どもたちの意識の変容過程の評価を深めていきたい。さらに、具体的なまちづくりのハード・ソフト両方にふみこんでいきたい。

地域住民の自主的な身近な環境育成と、地域と学校の相互連携過程への活動支援も継続的にかわっていききたい。

6 活動のポイント

6.1 活動の人材

NPO メンバーの中に重度の身体障害者でありながら紙芝居制作実践の「達人」が存在したことが今回の活動のひとつのポイントである。あわせて、「駄菓子屋・たけちゃん」の存在も大きい。

学校側の校長先生や担当の先生方に、制度の枠内に閉じずに、かつ「額縁」(フレーム)におさまらずに、人と人の「ご縁」「絆」(フレンドシップ)を大切にされていた方々がおられたことが大きい。

6.2 活動のための資金調達

今回の調査費が本活動にはずみを与えてくれたことはすこぶる大きい。

6.3 活動のネットワーク・支援

子どものまち表現学習の活動のネットワークは始まったばかりであり、地元をはじめ、広く全国的経験の網目をたくりよせ創造的活動の相互触発的関係をおしひろげていきたい。

6.4 その他ー「紙芝居風穴一座・座長」のコメント

先述したまちの縁側育くみ隊理事かつ「風穴一座」座長の久保康雄さんは、今回の活動の要点と課題を「紙芝居の魅力を探る」として次のように記した。まち育て表現学習における紙芝居の可能性を示すものとしてここにあげておきたい。

冷たい雨の降る2月22日、名古屋市北区大曽根の六郷北コミュニティーセンターにおいて、大曽根中学校三年生による まちづくり紙芝居 が、地域の住民の方々に披露されました。同中学では子どもたちにも地域住民としての意識と自覚を持ってもらおうと まち学習 が盛んで、平成15年度の三年生は総合学習に まちづくり をテーマに取り組んできました。

生徒たちはいくつかの班に分かれてそれぞれの講師について学習したのですが、この日紙芝居を披露したのは、その中の こんな広場が、イイナ グループの47名。学区に実際計画されている公園を自分たちなら「こんな公園にしたい」という希望を、個性的な7つのストーリーと絵で表現して、約30名弱の地域の人たちに向けて発表したのです。

集まった人たちの年齢層も性別もまちまち。おとなも子どもも、駄菓子を口にしながらお年寄りには昔を懐かしむまなざしで、テレビやゲームなど動きのある画面を見慣れている子どもたちは、動かない紙芝居の画面を新鮮なまなざしで見つめていました。

ストーリー的には公園建設に降りかかるトラブルをみんなの力で解決してゆくという展開が多かったのですが、生徒たちの紙芝居を見に来ていたひとりの女性がぼつりと言ったことがあります。「いまの中学生って公園に集まると何か悪さをするイメージがあって怖かったけれど、見方が

変わった。こんなにまじめにまちのことを考えているなんて…。わたしらも負けとれん気がするわ」大曽根中学の生徒たちのまちに対する想いがこの女性に限らず、地域の人たちの心を揺さぶり、まちへの想いを触発してゆく…。それはさながら水面に立った小さな波紋が風を受けて大きく広がってゆくように、大曽根地区の今後のまちづくりにおける住民参加の広がりを感じさせるには十分な言葉だったと思います。

私は心のバリアフリーをテーマにした紙芝居一座の活動をしている関係上、大曽根中学のまちづくり学習だけではなく、福祉学習においても子どもたちのアート表現の現場に立ち会う機会が多いのですが、とりわけ 紙芝居 という表現方法の奥深さには我ながら感嘆することがたびたびあります。

紙芝居は 絵 と 語り と 間合い とによって成り立つ日本特有の大衆文化ですが、語り手の個性あふれる話術もさることながら、静止している画面が一枚一枚引き抜かれてゆく瞬間のワクワクする感覚は、場面展開がせわしない動画では決して味わうことができないスリルと楽しさがあります（写真23、24、25）。また、紙芝居は優れたコミュニケーションツールとしての側面もあります。ストーリーを通して演者と観客との対話、作家と演者や観客との対話、物語と観客との対話、ひとつの物語からいろいろな対話が生まれます。そればかりではなく、やさしい絵と面白いストーリーに託せば、まちづくりにしろ福祉にしろ、専門的で堅苦しい内容を誰にでもわかりやすく伝えることが可能になるのです。

紙芝居の可能性は、何かを伝えたい人がいて、そこに確かなメッセージがある限り、無限の豊かさを持って広がってゆくのでしょう。



写真23 紙芝居は次にどんな画面がでてくるか、見る者に想像力を触発してくれる



写真24 同



写真25 紙芝居には静止画面の強さがある